

学位審査結果報告書

学位申請者氏名 瓜生 和彦

学位論文題目 「良い歯科医師」とは？

—歯学科学学生の臨床実習経験による意識変化—

What is a Good Dentist? : Changes in Awareness of Dental School Students in Undergraduate Clinical Training

審査委員 (主査) 角舘 直樹



(副査) 村岡 宏祐



(副査) 冨永 和宏



学位審査結果の要旨

後進を育成する歯科医療従事者は、将来歯科医師になる歯科学学生が考える良き歯科医師像を把握しておく必要があると思われる。しかし、先行研究で「良い医師像」や「良い看護師像」に関する報告はあるが、「良い歯科医師像」に関する本邦の報告は見当たらない。2000年代に入り、歯学教育においてプロフェッショナリズム教育の重要性が増しており、歯学教育モデルコア・カリキュラムにおいても歯科医師として求められる基本的な資質としてプロフェッショナリズムが掲げられている。Stern の神殿モデルによると、プロフェッショナリズムは「臨床能力」、「コミュニケーション・スキル」、「倫理的・法的理解」、「卓越性」、「人間性」、「説明責任」および「利他主義」の 7 要素から定義される概念である。そこで今回、申請者の瓜生氏は、プロフェッショナリズムに関する教育を受けた歯科学学生が「良い歯科医師」とはどのように考えているのか明らかにすること、および臨床実習を経験することによる意識の変化について検討することを目的に質問紙調査を行った。

対象者は平成 30 年度歯学部歯学科 5 年次学生 94 名であり、調査は「臨床実習開始時」、「臨床実習中」および「臨床実習終了時」に合計 3 回実施された。各回の調査において対象者は「良い歯科医師とはどのような人か」について箇条書きにて自由記述回答した。得られた回答は、Stern の神殿モデルの 7 つのカテゴリーに分類され、各時期および男女別に検討が行われた。さらにテキストマイニングを行い、単語の頻出度について分析を行った。

カテゴリー分類の結果、臨床実習開始時は「人間性」、実習中は「臨床能力」、終了時は「人間性」のカテゴリーの割合が最も高かった。男女別の解析ではいずれのカテゴリーにおいても独立性の検定による有意差は認められなかった。また、テキストマイニングによる単語の頻出度分析の結果から、名詞では 3 回の調査時すべてにおいて「患者」が最も多く、形容詞では、同様に「良い」が最も多かった。一方、動詞では開始時は「くれる」が最も多かったが、実習中および終了時は「できる」が最も多かった。臨床実習開始時は、「人間性」を重視し、「くれる」といった受動的な表現が最も多かったが、臨床実習中は歯科医師としての立場を意識し「臨床能力」や「コミュニケーション能力」を重視し、「できる」という能動的な表現が増え、臨床実習終了時は「人間性」を再認識していることが推察された。本研究より、歯学科学学生における「良い歯科医師像」が時期により異なり、臨床実習の経験を通して意識が変化することが示唆された。

公開審査において、申請者の瓜生氏に対して主査及び 2 名の副査により研究デザイン、分析方法、および研究の意義等について質疑応答を行った結果、概ね適切な回答が得られた。以上のことから、審査委員会では本論文を学位論文として価値あるものと判断した。